

和泉式土器とその時代

平成12年3月31日発行

狛江市和泉本町1-1-5

電話 (3430) 1111

I 和泉遺跡と和泉式土器

古墳時代から平安時代にかけて使用されていた、赤褐色の素焼の土器を、土師器はじきといいます。土師器は、かなり長期間にわたって作りつづけられていましたが、細かくみていくと各時期ごとにその形や製作技法に変化が認められます。そこで、このような形や製作技法のちがいに着目して、型式分類することによって、それぞれの土師器の作られたおよその時期を判定する目安にすることができます。

狛江市内にもこのような土師器が出土する遺跡が数多くみられますが、特に注目されるのが、和泉本町一丁目35番～37番に所在する和泉遺跡です。この遺跡は、昭和15年(1940)、神林淳雄・杉原荘介両氏によって調査され、住居跡3軒以上が発見された集落遺跡で、多くの土師器が出土しました。

この土師器は、同調査ではじめて発見されたもので、当時すでに知られていた、弥生時代の土器である前野町式土器(弥生時代後期後半)と、土師器である鬼高式土器(古墳時代後期)の中間段階に入る型式の土師器であると認められ、出土した遺跡名をとって和泉式土器と命名されました。その後、五領式土器(古墳時代前期)が発見されたため、現在は関東地方における古墳時代中期(5世紀代)の型式に位置づけられ、土師器の基準資料として全国的に有名です。また、これらが発見された和泉遺跡も、同型式の標式遺跡として広く知られています。

和泉式土器の具体的な特徴としては、ロクロを使用せず、粘土帯を重ねてゆく輪積み法と手づくね法によって成形され、文様はつけず、ハケメをわずかに残して全体をヘラ状工具で磨いて調整されていることがあげられます。また、甕かめ・埴かん・高坏たかつき・埴わん・甗こしき・小型手づくね土器等の器種があり、甕の胴部は球状にちかくふくらみ、高坏の坏部は大きくひろく、といった特徴も認められます。なお、こうした特徴は、関東地方の和泉式土器だけでなく、全国各地の同時期の土師器にも斉一的に認められるようです。

II 和泉式土器の作られた時代

和泉式土器が作られた古墳時代中期は、古墳時代でも特に画期的な時期で、日本最大の規模を誇る仁徳陵古墳だいせんと(大山古墳・全長486m)や、応神陵古墳おんだいごびょうやま(誉田御廟山古墳・全長425m)といった巨大前方後円墳が次々と築造された時期に相当します。また、それまでの奈良盆地(奈良県大和古墳群おのおやまと・佐紀盾列古墳群等さきたてなみ)から、大阪平野(大阪府百舌鳥古墳群もすず・古市古墳群等ふるいち)へと、最大級の前方後円墳の築造拠点が移動した時期でもあります。

これらのことは、ヤマト政権の本格的確立と、これに伴うその中枢部の移動、あるいは政権交代といった大きな政変があったことを示すものと考えられます。そしてこうした動きは、畿内地方ばかりでなく全国各地でもみられ、多摩川流域においても認められます。具体的には、4世紀代の大型前方後円墳である宝来山古墳ほうらいさん・亀甲山古墳かめのかやまが築造された田園調布古墳群から、5世紀前半の野毛大塚古墳のげおおつかの築造を契機に、この地域で最大規模の古墳が野毛古墳群へと移動することです。なお、狛江古墳群の造営が開始されるのは、この直後にあたると考えられます。

このような大きな政治的変動と、これを経て本格的に確立したヤマト政権のもとでは、それまで以上に密接な、中央（ヤマト）政権と地域の首長たちとの政治的結びつきが新たに要請されたと思われますが、この中央と地域との密接な関係の中で、これまでの地域ごとの独自性を色濃く残す文様をいっさい廃した、斉一的な土師器である、和泉式土器が登場してきたものと考えられます。

古墳時代の政治的関係は、ある面では、共に同一の祭祀を行うなかで、より強く結ばれていったものと想像されます。このことから考えれば、日常使われる容器である一方で、祭祀の場においては重要な祭器としての機能をはたす土師器（特に埴や高坏）が、全国的に斉一化されたことは、このような政治的結びつきが急速に全国にひろがっていったことを示すものといえるかも知れません。和泉式土器は、まさにそうした激動の時期に作られた土師器であるといえるでしょう。

Ⅲ 市内の和泉式期の主な遺跡

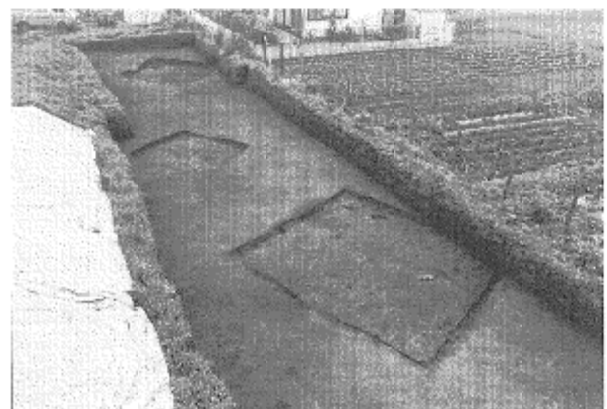
この時期の遺跡は和泉遺跡以外にも市内に存在することが、近年の発掘調査によってわかってきました。

和泉遺跡の北側に近接する原北遺跡では住居跡が検出され、市域の東端から世田谷区にかけて分布する古屋敷・相之原遺跡でも、住居跡が検出されました。また、兜塚古墳とその東側一帯に分布する橋場遺跡では住居跡4軒が検出され、このうちで最も規模の大きい3号住居跡（5.8m×5.5m）からは、多量の高坏や壺、勾玉形の石製品、鏡形の土製品、ミニチュア土器といった祭祀用品が出土しました。亀塚古墳を含めた市域の南西側に分布する田中・寺前遺跡からは高坏・壺等が出土し、市域の北西端に分布する小足立前原南遺跡では大型の住居跡（6.5m×6m）が検出され、軟玉製の管玉が出土しています。

このような調査成果から、これらの遺跡は、和泉遺跡と同時期の集落遺跡であったことが考えられますが、このほかにも同様の遺跡が市内にはまだ存在することも予想され、今後の調査にも期待がもたれます。また、亀塚古墳とこれにより数軒の住居跡が削平された田中・寺前遺跡や、兜塚古墳とその造営を支えたと考えられる橋場遺跡、経塚古墳とその築造直後に相当する経塚遺跡といった、集落遺跡と狛江古墳群（5世紀前半から6世紀中頃まで市内一帯に造営されたと考えられる）との関係についての調査・研究の進展もぞまれます。



和泉式土器（和泉遺跡出土）



和泉式期の住居跡（橋場遺跡）